



子宮がん検診の重要性と HPV(ヒトパピローマウイルス)タイピング検査

婦人科を開設してから今年の9月で3年が経過し、週1回(金曜日、月2回・土曜日)も診療ながら、患者さんの数も徐々に増え、子宮がん検診にもたくさんの皆さんにお越しいただいています。そこで今回は、子宮がん検診に加えて今年から新たに導入した検査について、ご紹介します。

●子宮がんの原因は？

一般的に呼ばれている「子宮がん検診」は、「子宮頸がんの検査」のことです。子宮がんには、子宮の入口にできる「頸がん」と、奥の方にできる「体がん」の2種類があります。検診では通常、子宮頸部の細胞診を行います。医師が必要と判断すれば体部の検査も追加します。

「頸がん」については、ほぼ9割以上がHPV(ヒトパピローマウイルス)というウイルスの感染によるものと分かっており、一方の「体がん」はエストロゲン(女性ホルモン)が影響することが多く、全くタイプの異なるものです。「頸がん」の原因であるHPVは性交渉で感染しますが、いわゆる性病や性感染症ではなく、どちらかというところ「風邪のウイルス」に近い感覚です。▼性交渉を開始した女性の約8割が感染すること▼20代で感染しても多くは自然に排除されること▼100種類以上あるHPVのうち、子宮頸がんになる危険性の高い型は14種類くらいで、しかもこの高リスク群に感染したとしても、感染が持続したごく一部が「頸がん」に進行する——ということが分かっています。

●子宮がん検診はなぜそんなに大切なの？

「頸がん」は、ウイルス感染が原因であり、また感染から発病までに5～10年かかるため、予防や早期発見・治療が可能な病気です。しかしその反面、発見が遅れると妊娠する前に子宮を失う可能性があり、生殖年齢の女性に対する正確な情報の提供や啓蒙が求められています。特に、日本の子宮頸がん検診の受診率は約20パーセントと、諸外国(米国等は80パーセント以上)に比べ極端に低く、この低受診率を補う形で、子宮頸がん予防ワクチン接種普及の必要性も訴えられています。

●HPVタイピング検査がなぜ必要なの？

当院では、子宮頸がん検診の際に、自費※ではありますが、HPVタイピング検査(HPVの何型に感染しているか、子宮頸部をブラシで擦過して型を判定する)を一緒に行うことが可能になりました。検診では、細胞の変化を診るだけでなく、現在HPV感染があるのか、さらにHPVの高リスク群(16・18型など)に感染していないかを判定できるので、これを基に、今後の検診をどのような間隔で受診していくべきか、予防ワクチンの接種を考えるべきかなどを判断することができます。

※すでに「前がん状態」(「軽度異形成」「中等度異形成」など)の診断が出ている場合は、常勤医のいる施設で1回のみ、保険診療で実施できます。

HPV検査の併用にかかわらず、医療機関で定期的に子宮がん検診を受診することをお勧めします。



婦人科医師 大野 智子

